

エフエムひらかた 訪問記

金田一 秀穂

絶望と恐怖が渦巻き、明日が見えないシベリアで唯一、抑留者を励まし、生きる希望を与えた歌が“シベリア夜曲”だった。

身近な存在のコミュニティー、FM ラジオに期待するリスナーからの要請により、エフエムひらかたの番組で“シベリア夜曲”の作曲者を捜すこと3か月。やっと本人が見つかった。その人は枚方市に住む堤正晴さん 86 歳。番組は新聞の誤報がきっかけで存命であることが発覚した元シベリア抑留兵の堤さんの独白で



「大人の童話 〜チーム記虎のハーフタイム」にて
MC の記虎敏和さんと

構成されている。リスナーに密着した地域エフエムラジオ局の特性を存分に生かし、忘れ去られようとしている戦中戦後の貴重な記憶を音声で記録した。

この作品『幻のセレナーデ 〜シベリア夜曲ノート』は、第 36 回放送文化基金賞ラジオ番組部門ラジオ番組賞を受賞。

金田一秀穂ラジオ番組審査委員長が、今年 7 月末、この作品の企画・構成の岩田隆清さん、FM ひらかた局長の平井正世さんを枚方に訪ね、お話をうかがった。エフエムひらかたの生放送にも出演。

生まれも育ちも関東の人間には、大阪の地名が読みにくい。十三とか靱とか箕面とか、知らなければ読めない。枚方も、かなり長い間、“まきかた”と言うんだと思い込んでいた。今回のラジオ賞受賞作品は、この枚方のコミュニティー FM 局の制作によるもので、どんなところで、どんなふうにラジオが作られているのか、見に行ってみた。

作品はシベリア抑留問題を扱っている。「シベリア夜曲」という、収容所で愛唱された曲の作曲者は、死んだと思われていたのだが、実は枚方に現存して住んでいるということが分かり、その堤さんというおじいさんが、シベリアでの話をとつとつと語ってくれる。中央のメジャーなラジオ局が扱ってもおかしくない素材であるが、それを、地方局よりもさらに小さな、町のコミュニティー局が取り上げて、堂々とした一時間番組に仕立て上げている。メジャー局的な、人工的な編集があまり加

わっていない分、その素朴な語り口とあいまって、強くリアリティーを感じさせる音になっている。シベリアでの経験、その後の日本での人生が、聴く者にきちんと届けられていく。

枚方は、最近はやりの、日本一暑い町のひとつである。私たちが訪れたときも猛暑の日だったが、幸か不幸か、その日の第一位は、熊谷だか多治見だかに奪われた。しかし、暑いことに変わらない。最初に訪れたのは、その市役所。昔ながらの小さな古い建物で、役所の建物ばかりが税金を使って立派になっている他の多くの市町には、ぜひ見習って欲しい姿勢で、好感が持てた。昔ながらのエアコンの大きな音が響く中、受付も小さく暗い。廊下も人がすれ違える程度。それでも機能しているのだから、何も建替えることはない。そこで、わざわざ市長さんが迎えてくれて、おいしい昼ごはんをご馳走になった。



企画・構成の岩田隆清さん(いわた・りゅうせい)
フリーディレクター・“じおら”代表

枚方の町のラジオ局は、阪神淡路大震災の後に作られた。震災時の情報センターとしてのラジオの役割が見直されたのだ。ラジオと言っても、ふつうの人間には、運転しながら聞く交通情報か、ナイター中継、音楽番組ぐらいしか頭に浮かばないけれど、大災害が起きたときに、どこへ逃げればいいのか、どこへ行けば適切な保護が受けられるか、どこの地域のどの人は無事か、どこで水や食料がもらえるか。そのような細かな情報を伝えるために、このラジオ局は、市の肝いりで作られた。また、大きなラジオ局は、事件当初は大々的に報道をするけれど、すぐに忘れる。



平井正世さん(ひらい・まさよ)
FM ひらかた取締役 局長

しかし、災害に遭った当事者の暮らしは、それから何年も続く。その人びとのためにも、誰もが忘れてしまった後でも、地味にこつこつと継続的に情報を提供していくメディアが必要である。

それで、ほとんど素人の役所の人間たちが中心になって、ラジオ局を運営し始めた。最初は中央のラジオ局から何人もスタッフが派遣されてきて、いわゆるふつうのFM放送がされていた。音楽中心のFMである。しかし、やがて市民たちから苦情が寄せられるようになる。音楽だけでは退屈である。文化の香りが欲しい。こんな番組ばかりでは年寄りには聞かない、というのだった。

このFM局の一番の役割は、いざというときのためにある。しかし、ふだんから聞いてもらえなければ、信頼を置いてもらえなければ、そのときに役に立たず無駄になってしまう。なんとかしなければ、という動きがあり、それが今回のような、非常に意欲的な番組作りに繋がった。



金田一秀穂ラジオ番組審査委員長

サテライト・スタジオが枚方駅ビルのなかにある。狭くて小さなスタジオで、駅を降りた通りすがりの人たちが、金魚鉢の中の人と目が合って、ニコニコしながら立ち止まって聴いている。私たちが訪ねたときには地元の名門高校のラグビー部監督がMCをしていて、桃太郎と金太郎と浦島太郎が友情について作文を書いたら誰が一番上手に書けるだろうか、という奇想天外なテーマについて語り合っていた。高等数学では、答えを出すことよりも、問題を作ることのほうが重要であると聞いたことがある。答えを導き出すことは易しい。問題を作ることのほうがずっと難しい。この番組のテーマを聞いて思い出したのはそのことだった。こんなテーマを考え付くのはよほどの人であるに違いない。桃太郎であろうと金太郎であろうと浦島太郎であろうと、そんなことはど



うでもいい。それについて語れるテーマであり、考えてみたいと思えるようなテーマで、しかも、思いつきもしないようなことを考え出すのは、すごいことである。

サテライト・スタジオのあと、本社と呼ばれるビルを訪ねた。といっても、駅前の雑居ビルの片隅に、事務室とスタジオ、テーブル棚、それに小さな応接室があるだけのことである。放送局と分かるのは、入り口に靴脱ぎ場があって、中で靴音が立たないようにになっている程度。そこに数人の人々が働いている。どちらかというと高校の放送室に近い。そんなところで皆が楽しそうに番組を作っている。部活のノリと言ったら怒られるかもしれな

いのだが、親しみやすさ、小回りのききそうな様子、人にモノを伝える喜びが、隅々に感じられる。ラジオの原点のような現場である。聴いている人も伝える人も、同じ街に暮らし、顔なじみである。送り手と受け手の距離が非常に近い。気軽である。しかし、それだけに責任ある内容も求められる。

とても楽しそうなオフィス兼スタジオは、危機管理という重要な使命から出発していても、まだまだ誰も考えたこともないようなラジオ放送の可能性をはらんでいて、それを実現できる場であるように思えた。

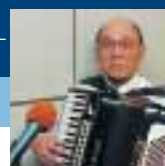
ラジオを取り囲む環境は変化の真っ只中にある。インターネットにしろケータイにしろ、今までなかったさまざまなメディアの出現によって、どのような形でラジオが生き残るのか、分からない。しかし、逆に言えば、とても面白い時代であるとも言える。これからどんなことを仕出かしていくのか、こういうところに、ラジオの未来が存在しているのではなかろうか。



女子大生のリスナーが描いた番組の印象画

■ シベリア夜曲考

シベリア抑留体験者 “シベリア夜曲” 作曲者 堤 正晴



私は極寒、飢え、重労働のシベリアで地獄の釜の底をみた。今でもふとした折、その時の状況が立ち上がってくる。収容所では食糧事情が悪いため下痢が続き、伐採作業中に木陰で用を足すと、便が瞬く間に瞬間冷凍して、シューと粉が吹き出た。また寒さの為右足が凍傷になり、爪が全てとれ、生えてきた爪は変形したまま。そのような生き地獄の中で、抑留者に唯一生きる希望を与えたのが

“シベリア夜曲” だった。作詞は西原谷夫軍曹、作曲が私。心の琴線に触れる優

しく力強いメロディーと、魂の宿った情緒溢れる詩が「シベリアの凍土に倒れる」と覚悟を決めた抑留者の心を捕らえたのだ。このシベリア夜曲をさらに広めようと演奏することにした。だが、楽器がない。そこで電話の古い配線から細い銅線を抜き取ってギターを、また馬屋担当の戦友に頼んで馬の皮を手に入れて、太鼓を作った。木の箱に弦を張っただけの手製のバイオリンも作り、馬の尻尾の弓で弾いた。そして元巨人軍監督の水原茂さんが係だった入浴場や、白樺の樹皮を燃やしただけの薄暗い灯りの部屋で練習に励んだ。その甲斐あって、時々開かれる収容所の交流会の最後は、シベリア夜曲の演奏と大合唱になり震えるような感動に包まれたのを覚えている。

帰還して43年たった1991年10月10日は私にとって一生忘れられない日となった。シベリアで初めての遺骨収集を報じた新聞に、父親がシベリアで亡くなった松島トモ子さんとシベリア夜曲を作曲した私の事が取り上げられたのだ。しかし私は帰国の夢が果たせず、抑留中に死んだ事になっていた。その訂正記事が3日後にでた。それから18年たった去年の夏、リスナーからの依頼でシベリア夜曲の作曲者を探していたエフエムひらかたの取材を受けた。さらに生番組にも出演して、寝ても覚めても常に生きて祖国に帰りたい一心がシベリア夜曲を誕生させた事などを話した。エフエムひらかたは、年末に一連の動きを特別番組として放送、それが第36回放送文化基金賞の番組賞に輝いた。受賞が各新聞に取り上げられると、元抑留者や遺族から「是非、懐かしいシベリア夜曲を聞きたい」という電話や楽譜希望の手紙が殺到し、今もその対応に追われている。